

C-61 菅江真澄遊覧記「錦木」にみる初期こぎん刺しとその周辺
昭和女大短大 ○岡野 都

目的 こぎん刺しの歴史をたづねるとき『菅江真澄遊覧記』(1783~1829)が必ず引用される。同書は、真澄が奥州常民の生活とあるがまさに丹念に記録したもので、とくに津軽領内の紀行には、こぎん刺しについて再三述べており、この期にすでに、こぎん刺しの技法が庶民の生活に定着していたとある説が成立しているのである。また同時期の比良野貞考著『奥民図彙』(1788)は、こぎん刺しを図に表わしたもので、上述の説を裏づけると共に、初期こぎん刺しの状況を知るための貴重な文献資料となっている。しかし、本研究を進めるうちに『菅江真澄遊覧記』の中の雑葉集「錦木」に、こぎん刺しの注目すべき図が二葉納められていることを見出した。いつ頃、誰によって描かれ、どのような経緯で「錦木」に編集されたのか、またその図に基づいて着物の形態、刺しの部位、刺し方などを究明することは、当時の庶民の生活相をこぎん刺しにより照射することにもなる。

方法 秋田県大館市市立栗盛記念図書館の真崎文庫に秋田県重要文化財として納められている「錦木」中の図について、関係文献及び遺品類などにより考証を行なった。

結果 ①「錦木」の図二葉は、津軽における南岳のオ一人者毛内茂幹によって1795~1799年の間に描かれたものであり、初期こぎん刺しの図として『奥民図彙』同様、貴重な資料であることが証せられた。②着物の形態は、着丈の長さの晴着、腰切り・膝切りの仕事着、袖無羽織風の三通りであると推測される。③刺しは肩しまがあることから「西こぎん」の祖型とみられるが、身頃全面の総刺しには、布目に対してタテ・ヨコ・左右斜めの四方向の直線からなるぐし縫いによる模様刺しが認められたことも特徴である。